

メッセージアウトライン 創世記44:1～34「ユダのとりなし」

ヨセフはカナンの地から再び食量を買いに来たヨセフの兄弟たちを自分の私邸に連れて行き、食事を出してもてなしたが、ベニヤミンの分はほかの者よりも五倍も多かった。ベニヤミンはヨセフと同じ母ラケルから生まれた弟でヤコブの家の末子であり、ヤコブの最も大事にしていた息子であった。彼らは目の前にいるエジプト第二の権力者がヨセフであるとは全く気がついていない。

[1-2]「ヨセフは家を管理する者に命じた。『あの者たちの袋を、彼らが運べるかぎりの食料で満たし、一人ひとりの銀を彼らの袋の口に入れておけ。それから、私の杯、あの銀の杯は、一番年下の者の袋の口に、穀物の代金と一緒に入れておけ。』彼はヨセフのことばどおりにした」

ヨセフは兄たちに最後のテストを試みる。それによって、兄たちが本当に改心しているかどうかを知ろうとする。「銀の杯」語源からは鉢のような形のものと思われる。

[3] 翌朝、彼らは食料を載せたろばと一緒に送り出された。兄弟たちは一回目のエジプト行きの際に受けたスパイの疑いについては問題にもされず、人質を残すこともなく、すべてが順調に運んだことを喜びつつ、帰り道についたことであろう。

[4-6]「彼らが町を出て、まだ遠くへ行かないうちに、ヨセフは家を管理する者に言った。『さあ、あの者たちの後を追え。追いついたら、『なぜ、おまえたちは悪をもって善に報いるのか。これは、私の主君が、飲んだり占いをしたりするときに、いつも使っておられるものではないか。おまえたちのしたことは悪辣だ』と言うのだ。」「彼は追いついて、このことばを彼らに告げた」

「銀の杯」はヨセフが飲んだり占いをしたりするときに、いつも使うと説明されているが、ヨセフは実際にはまことの神を信じる者として、占いなどはしていなかったであろう。この占いとは杯に水または油を入れ、その表面に金や銀の細片などをまき、そこにできる模様などによって占うもので古代社会においては広範に行われていた。

ヨセフの兄弟たちは追って来た管理者のことばを聞いて、心臓が止まるようなショックを受けたに違いない。

[7-9]「彼らは言った。『あなた様は、なぜ、そのようなことをおっしゃるのですか。しもべどもがそんなことをするなど、あり得ないことです。袋の口で見つけた銀でさえ、カナンの地からあなた様のもとへ返しに来たではありませんか。どうして、あなた様のご主人の家から銀や金を盗んだりするでしょう。しもべどものうちで、それが見つかったものは殺してください。そして、私たちもまた、ご

主人の奴隷になります。』」

彼らはいわれのない追及に激しく弁明をする。そして、これは非常に誠実な弁明である。少しも自分たちに有利になるように話を進めていない。彼らは自分たちのいのちをも差し出してこのように言っている。

[10] ヨセフの家の管理者は彼らの言うことはもっともだと同意するが、そこまで厳しい罰を与えることはせず、銀の杯が見つかった者だけ奴隷とし、ほかの者は無罪としようと言う。

[11-13]「彼らは急いでそれぞれ自分の袋を地面に降ろし、それぞれの袋を開けた。彼は年長の者から調べ始めて、年下の者で終えた。すると、その杯はベニヤミンの袋から見つかった。彼らは自分の衣を引き裂いた。そして、それぞれろばに荷を負わせ、町に引き返した」

「衣を引き裂く」とは非常な悲しみの表現である。ヨセフの家の管理者のことばに従えば、彼らはベニヤミンだけ残して、自分たちはカナンの地に帰ることができたはずであるが、彼らはベニヤミンと運命を共にしようと一緒に町へ引き返した。ここに二十年前にヨセフを憎み、捕えて奴隷として売り飛ばした兄たちの態度とは全く違った姿を見ることができる。

[14] 彼らがヨセフの家に戻って行ったとき、ヨセフはまだ、そこにいた。「彼らはヨセフの前で顔を地に伏せた」彼らは何か自分たちの思いを超えた力が働いてこのような結果になったことを思い、理解できないままに、それを受け入れざるを得なかった。もはや万事窮すである。

[15]「ヨセフは彼らに言った。『おまえたちの、このしわざは何だ。私のような者は占いをするということを知らなかったのか』」

彼はまことの神を信じる者として、実際にはそのようなことはしていなかったが、このように言ったのは、占いの盛んなエジプトの権力者であることを印象付けるためであったであろう。

[16]「ユダが答えた」ここで長男のルベンではなくユダが前面に出て答えているのは今回の旅にはユダがベニヤミンの保証人となるということで(43:9)、父ヤコブを説得して実現したことであったので、彼は兄弟たちを代表する立場で発言しているのである。

「神がしもべどもの咎を暴かれたのです」今回のことでは彼らは潔白でやましい思いはないはずであり、ベニヤミンの袋で見つかったヨセフの銀の杯も当のベニヤミンにとっては身に覚えのないことであり、兄たちとともに無実を主張できたであろう。しかし、現実には銀の杯がベニヤミンの袋から見つかったということに、彼らは過去のあのヨセフに対して犯した罪の報いを神によって受けたのだと考えたのである。それでユダは「私たちも、そして、その手に杯が見つかった者も、あなた様の奴隷となります」と言った。

[17] しかし、ヨセフは杯を持っているのを見つけた者、すなわちベニヤミンだけが奴隷となる。ほかの者は安心して父のもとへ帰るがよいと言った。ヨセフはベニヤミンだけをとどめてエジプトで兄弟仲良く暮らそうと考えたのであろうか。そうではない。ヨセフの今回の計略は兄たちに対する最終的な刑罰、そして本心を探る意味があったのである。彼らがベニヤミンをエジプトに残し、父との約束を破って自分たちの安全と将来を確保しようとするのかどうか。彼らの目の前に重大な誘惑と選択の危機が提出されたのである。

[18-34] ここからユダがヨセフに近づき、兄弟たちを代表して切々と自分たちの立場を訴えていく。ユダのとりなしである。彼は男らしく、また礼儀正しく、率直に、敬意をもって、順を追って事実をそのまま語っていく。ここには弟ベニヤミンを救い、また父にこれ以上の苦しみを与えたくないとの動機の純粹さ、力強さが見られる。

その内容は次の六つに要約できる。①ユダは先にヨセフの語ったことを繰り返してヨセフの注意をうながしている(19,21,23)。②父がどれほどベニヤミンを愛しているかを語り、ヨセフの同情に訴えている(20,22,29)。③年老いた父にとって、ヨセフのほかにベニヤミンを失うことは、父のいのちをとることと同じであることを切々と訴える(29~31)。④ユダはヨセフを「あなた様」と八回も繰り返して呼びかけている(16,18,19,21,22,23,24,33)。これもかつてのヨセフの夢の実現である。→37:7 ⑤特に父のことばを繰り返し訴えている(25,27~29)。ユダは父ヤコブの口ぶり、その恐れ、不安をそっくりそのまま再現するように語ったのであろう。父の心情がヨセフの心を動かす。⑥ユダは自分がベニヤミンの保証人となっているので彼の身代わりとなり、ヨセフの奴隷になりたいと申し出る(32~34)。

このようなユダの必死のとりなしに対して心を動かされない者がいるであろうか。

今日の個所ではベニヤミンそして父親ヤコブに対してヨセフの兄弟たちの思い、姿勢、考え方というものがはっきりと表されている。かつて彼らはヨセフを憎み、苦しめ、捕え、奴隷として売り飛ばしても平気な顔をしていた者たちであった。しかし、今、兄弟たちは父のことを心底気遣い、弟ベニヤミンだけを置いては帰れないと全員がエジプトに戻り、その中でユダが自分の一生をかけ、いのちをかけて弟のために身代わりになろうとしているのである。これは単にあわれみを求めるためではなく、代わりに奴隷として苦しむための申し出である。

ヨセフは兄弟たちのこのような麗しい愛における一致、すばらしい変化に胸を打たれる思いであったことは間違いない。こうして長い間のヨセフのエジプトでの苦しみは、その兄弟たちを変える神のわざのために用いられているのであり、それはまたイスラエル全体の救いへとつながっていくのである。

ユダのいのちがけのとりなしは、私たち人間の罪の贖いのためにご自身を十字

架においてささげられた神の御子イエス・キリストの身代わりの死を思わせるような出来事である。やがてイエス・キリストがこのユダの家系、子孫から出られるのは単なる偶然ではないであろう。このユダのいのちがけのとりなしの行為が、やがて父ヤコブの預言によるユダ族の栄光へとつながっていくのである。→49：10

イエス・キリストは私たちの罪の贖いのために十字架上で身代わりとなって死んでくださった。そして三日の後に死より復活され、天に昇り、今も父なる神の前で私たちのためにとりなしをしておられるのである。→ヘブル7:24~25、ローマ8:34

すでにイエス・キリストを自分の救い主と信じて神のものとされた者は、今度はまだ救われていない家族や友人、知人、周りの人々の救いのためにとりなしの祈りに励む者となることが大切である。